シオン通信

大宮シオン･ルーテル教会 礼拝説教集

2010年9月　第28号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax：048-663-0215

URLhttp://omiya.church.ne.jp

Email :himei-y@oregano.ocn.ne.jp

大宮シオン･ルーテル教会

梁　熙 梅(やん･ひめ)

神さまの恵み豊かさを知らされる秋です

あれだけ気性の激しかった暑さも新しい季節の訪れには場を譲るしかありませんでした。嬉しく秋を迎えているのですが、衣替えする間もなく、ときに肌寒い季節になりました。夏の衣を何とか重ね着して過ごしていますが、皆さんはいかがお過ごしですか。今年の暑さに多くの駄目ジーを受けていることと思いますが、激しい季節の変化の中でも主の豊かな恵みの季節を深く味わえるときでありますように祈ります。

教会の9月の様子ですが、12日の主日は、関東地区一致祈祷日・交換説教日として迎えましたが、派遣する教職が足りないため、大宮教会では信徒が司式と説教を担うことになりました。私が赴任して初めての試みでしたが、とても恵み豊かな礼拝だったと、礼拝に与った皆さんから伺っています。その日の説教を本紙に載せていますので、どうぞお読みください。

また、9月19日の主日礼拝の中で三浦和代さん(旧姓田口)のご長男の浦光生くん(4ヶ月)が幼児洗礼に与りました。洗礼名はサムエルです。光生くんの成長が神さまに祝福され、イエスさまの愛を周りに伝える大人になりますように祈っています。

9月20日(月)は、東京ルーテルセンター教会にて関東地区信徒研修会が行れました。今年は、聖公会の植松功さんをお招きして、「テゼの祈り」学びと実践を行いました。80名近い方々が集まり、讃美と祈りの恵みを分かち合うことができ、分かれてからも、「とてもよかった」「行くかどうか迷ったけど行ってよかった」と、皆さんから感想をいただいています。讃美と祈りは私たちの魂を生き返らせてくれるものですね。

けれど、私たちの歩みの中には魂の潤うことだけではありません。45年間、教会の宣教のパートナーとして地域の宣教を共に担ってきた英語学校が、その幕を降ろすことになりました。アメリカからの教師志願者がいないために閉校に至っています。長い間、地域に愛され、多くの方々の出入りの場として用いられてきたことは、神さまに愛されていた証しだと思います。3月のはじめ頃に、感謝の心を込めて閉校礼拝を行います。

9月は忙しい一ヶ月でした。忙しい中でも中断されることなく普段通りの歩みへと進められているということは、すべてが神さまの恵みにほかなりません。迎えられた10月もこの豊かな恵みを皆さんと分かち合いたいです。心から感謝いたします。

２０１０年9月１２日　　関東地区一致祈祷日・交換説教日

聖　書　　ルカによる福音書１５書１～１０節

1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。3 そこで、イエスは次のたとえを話された。4 「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、6 家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」8 「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。9 そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。10 言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

キリストとの出会い

奨励者：禹明哲(う みょんちょる)

一言お祈りいたします。

私達の恵み深い神と、主イエス・キリストから、恵みと平安が私達にありますように。また、御言葉を語るためにこの壇に立てられた私に、聖霊を通して力を与え、御言葉を正しく伝えることができますように。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

私が初めて大宮シオン・ルーテル教会を訪れたのは、２００２年の春でした。

その頃、私は旧大宮市内の教会をいくつか周っていました。６年間の大学生活を終えて、私は地元の大宮に戻るとともに、今まで関心を持っていなかった教会生活を探し求めるようになりました。その理由は、今振り返って考えますと、大学生活の中で「生きることの本当の意味」は何なのか、を真剣に考えたからと言えるかもしれません。

当時の私は孤独でした。家族は元気に過ごしており、友人もいましたが、なお私は孤独を感じていました。自分の限りある人生が、何のためにあるのかが分かりませんでした。私は大学卒業後、就職をせずにアメリカ留学のための勉強をしていました。他の卒業生が皆就職して新生活をスタートしているのを見て、う

らやましいと思い、なぜ自分は勉強を続けているのか、その理由がわからなくなっていました。

私は学生時代にアメリカ留学に夢と希望を抱いていたのですが、今振り返ると、学生時代に抱いた留学への夢や情熱は、逆境にあっては脆いものだったなと思います。

大宮シオン・ルーテル教会を訪れたきっかけは、とても単純です。英会話の看板が目に入ったからです。英会話の力を伸ばしつつ、聖書を学べるなんて、なんてサービスが良い教会なんだろうと考えました。

先ず日曜日の主日礼拝に参加しました。当時役員をなさっていた宮本嘉也さんに案内をしていただきました。礼拝後、嘉也さんから「桜を見ながら昼食を食べましょう」と誘われ、嘉也さんと民さんと３人で「市民の森」に出掛けました。嘉也さんの片意地を張らない気さくな雰囲気に、いつしか私は緊張感が解けました。また、嘉也さんの人当たりが私にとってあまりにも優しく、かつありがたかったです。私は、嘉也さんは「人生の意味」を理解した人であり、理解できた理由がきっと教会にあるに違いないと考え、主日礼拝に続けて参加しようと思いました。

当時、教会では芝先生が教職に就いていらっしゃいました。芝先生の説教を通して初めて聖書の解き明かしを聞いた私は、とても大きなショックを受けました。「人生の意味」について、キリストを中心において語っていたからです。教会に来る前の私は、キリストの名前を聞くとどうしても尻込みしてしまっていました。しかし、芝先生の説教では、人生とキリストの関係がとても自然に説明されていました。その説明があまりにも自然だったので、むしろキリストなしで「人生の意味」を考える方が無意味なのではないのかと思い始めました。こうして私の初めての教会生活が始まりました。

私の教会生活において、中断すること、すなわち教会に通わないことが今まで２回ありました。

１回目はアメリカ留学です。２００２年の末から２００３年の末に掛けて、アメリカに留学しました。アメリカ時代には、教会に通うことがほとんどありませんでした。そして、学業と人生について多くの悩みと心の傷を抱え、大学を中退し、日本に帰国しました。帰国後再び当教会を訪れた際、芝先生にとても歓迎されたことを覚えています。

２回目は嘉也さんの死です。当時の私にとって嘉也さんの死はとてもショックでした。嘉也さんの病気のことは礼拝後の報告で知らされていましたが、治療中の嘉也さんとも話をしたことがありましたし、その時の嘉也さんは元気そうだったので、まさか亡くなるとは全く想像していませんでした。嘉也さんとはもっと沢山語り合って、信仰生活について教えて欲しいと思っていました。信仰の、そして人生の先輩である嘉也さんが亡くなったことは、私にとって大きな目標を失った感じでした。その後私は、教会に行く意欲が少しづつ減り、いつしか御言葉が私の生活から忘れられるようになりました。

私が再び教会に通うようになったのがいつ頃であったかは、正確には覚えていません。日本での仕事が順調に進み、生活に余裕が生まれるとともに、再び「人生の意味」について深く考えるようになった頃からであったと思います。芝先生の説教を聞くことはやはり喜びでした。聖書を購入し、自宅で毎晩聖書を読んだりしていました。教会生活と言うには、少しおこがましく、自分勝手なものだったとは思いますが、私の生活の中に御言葉が再び戻って来ました。平日の仕事と日曜日の主日礼拝の日々を再び楽しめるようになりました。

この頃から洗礼について意識するようになりました。芝先生は以前から私に洗礼を勧めていて、「洗礼は自分が受けるものではなく、神様が招いているものだからね。」と何度も教えていただきました。しかし、洗礼の決心は中々できませんでした。洗礼を受けると、今までの自分が自分でなくなり、別のものに変わってしまうような不安感がありました。日曜日に教会に通い、それ以上は教会と関わらない日々に満足し、変化することを恐れていました。結局、悩みながら時間だけが過ぎ、芝先生は他教会へと移られ、代わりに梁先生が当教会へ来られました。

私は２００７年のペンテコステの日に洗礼を受けました。洗礼を受ける直接のきっかけは、「悩み疲れ」です。悩み過ぎてもうこれ以上考えることができなくなっていました。そこで、神様の招きに素直に従おうと思いました。今までの古い自分を捨てて、新しい自分になろうと思いました。自分で決意して洗礼を受けたわけではなく、全てを神様の御手に委ねようと思いました。

先程拝読していただきました、ルカによる福音書１５章１節～１０節には、「見失った羊」のたとえと「無くした銀貨」のたとえが記されています。そして、１５章１０節には、「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使達の間に喜びがある。」と記されております。洗礼を受ける前の私は、神様によってではなく、自分の力によって全てを判断しようとしていました。神様に背を向けていた私は、重い罪を犯し続けた罪人であったと思います。聖書を読んでいながら、罪から逃れることができなかったのです。私は、聖書のたとえにおける、見失った羊であり、銀貨でありました。洗礼を悩み続けていた日々は、神様の目から懸命に逃れようとする私の姿だったと思います。

しかし、最後には、私は神様に見付かりました。そして神様のそばへと誘われました。私はこれ以上神様から逃れることはせず、ありのままの姿を神様の前にさらすことを選びました。今までの罪を悔い改める道を選びました。いや、選んだというよりも、そうせざるを得なかったのです。身を任せるしかなかったのです。私のこのような悔い改めが天における喜びであるという、聖書の御言葉に、私は救われる思いがします。

私があれ程探していた「人生の意味」とは、自らの力で見付けるものではなく、あるいは作り上げるものでもなく、神様から与えられている恵みを受け取り、神様とともに歩む人生なのだと気付きました。

私は、先程申しましたように、洗礼を受けることを大変悩みましたが、洗礼後、何回か自分自身に問い掛けた質問があります。キリスト教を捨てて、信仰のない元の日々に戻ってはどうかと。しかし、この質問に対する私の答えはいつもノーでした。人生の意味を問い続けた悩み多い人生に戻ることは、私にとって恐怖そのものです。棄教することはあり得ないことです。私は今後自分の中に、そして側に、イエス・キリストを迎え入れて生きて行くことを確信しています。

私は、本日の福音書に記載された「見失った羊」のたとえと「無くした銀貨」のたとえを読むとき、神様の忍耐強さと恵み深さを思うと同時に、私達人間の鈍感さを思わずにはいられません。私は、神様の呼び掛けに対して本当に鈍感でした。教会に連なる人々を通して、具体的には嘉也さんや芝先生やその他多くの人々を通して、神様のたくさんの恵みと呼び掛けを受けていながら、私は全く鈍感であり、その呼び掛けを無視することに頑なでありました。振り返って見ると、自分でもなぜそんなに鈍感であったか不思議に思います。知恵の実を食べた人間の罪深さだとしか説明できません。しかし、最後には神様の忍耐強さが勝利しました。

私は自分の力では信仰を保つことはできないことを自覚しています。神様の恵みに与ってこそ、初めて信仰を保ち、神様に正しく向き合うことができることを知っています。私の信仰生活及び教会生活において、３回目の中断がいつ起こるかわかりません。自分の罪深さを軽んじ、傲慢になったとき、信仰の危機が訪れるのだと思います。しかし信仰の戦いは、自分の力ではなく、神様の力によって勝利することを知っています。私は既に洗礼の恵みに与った身ではありますが、このことに慢心せず、これからも自分の思いを捨てて、神様の思いを自分の思いとし、神様の支えによって、信仰生活を守って生きたいと思います。

お祈りいたします。

恵み深い神様、罪人として救われることのない私を、あなたの忍耐強さと恵み深さによって救ってくださり、キリストに連なる群れの中に加えて下さいましたことを感謝いたします。一人の罪人の悔い改めによって天に大きな喜びが生まれたことを、私達は知っております。どうぞ、この天の喜びが私達の喜びとなるように、私達に聖霊を注いでください。

私達の群れの者であるはずなのに、ここにいない者が多くおります。主よ、失われた者に対するあなたの悲しみが私達の悲しみとなり、私達も主イエスとともに失われた者を探し続け、呼び続ける業に献身することができますよう、どうぞ力をお与えください。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

９月２６日　聖霊降臨後第１８主日礼拝

ルカによる福音書１６章１９～３１節

19 「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。20 この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、21 その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。22 やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。23 そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。24 そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』25 しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。26 そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』27 金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。28 わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』29 しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』31 アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

説　教

今隣にいる人の声に聞く

今日私たちが聞くように与えられている福音書の箇所は、あの有名な「金持ちとラザロ」の物語です。この物語は、他の福音書にはない、ルカ福音書だけの物語ですが、多く知られている有名な物語です。

先週の説教を聞いた方は思い起こしていただきたいですが、永遠のものとの向かい合い方によって、この世で与えられている富との向かい合い方が変わってくる、という話しをしたと思いますが、今日の「金

持ちとラザロ」の物語は、その具体的な譬だと理解すればいいと思います。そういう意味でも、先週から続く富と神さまとの関係の中で語られるみ言葉を継続して聞くということは、私たちが何を持っているのか、または何をしているのかということよりも、私たちの心がどうであるか、それが深刻に問われているのだと思います。

私たちは今礼拝するために教会に集められていますが、私たちの心も、ここに伴っているでしょうか。それとも、昨夜まで悩んでいた思い煩いのために、心の伴わないまま、神さまの招きを受けているのでしょうか。仕事や生活の悩み思い煩い、人間関係の悩みでいっぱいになっている心の中を、今は空っぽにして、今週の糧として与えられる福音で満たされますように祈ります。

さて、「ラザロと金持ちの物語」の中に入って行きたいと思いますが、この「ラザロと金持ちの物語」は、現世から来世へ渡っていく、つまり、生きるプロセスである過程と、その過程によって決められる結果が同時に描かれる物語です。二人のこの世での様子は 19 節～21 節に記されている通りです。

「『19ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。20 この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、21 その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。」

これが現世の、この世での状況ですが、金持ちは「紫の衣や柔らかい麻布」を着て、一般の人たちが一週間に一度食べられるかどうか分からない肉を毎日食べて暮らすような、贅沢な暮らし方をしていました。

ところが、きっと乞食であろうラザロは、体のいたるところには腫れ物が出ていて、それが炎症を起こして、その傷口を犬(野良犬)がなめにきます。けれど、その犬を退けるほどの気力さえ、ラザロにはありません。ラザロの体がひどく衰弱していることがわかります。

つまり、ラザロは「**その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた**」。このことは、ラザロには、金持ちの食卓から落ちるパン屑さえ拾って食べることがゆるされていなかった、ということになります。ラザロがつばを飲み込みながらいくら食卓を眺めても、この金持ちからは一切、何も、もらえなかった。このことが、金持ちが地獄行きの道を辿らなければならない理由でした。お腹を空かせてつばを飲み込みながら食卓を眺める人に、これっぽちの憐れな心さえもてなかった罪。金持ちの罪です。

そして、２２節からはこの世での生を終えた二人が、あの世で、その立場が逆になっている様子が書かれています。

「22やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。23 そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。」

今日の糧とされているルカ福音書は、短い数節の中にこの世とあの世が描き出さ

れているために、一瞬、行いの結果、天国と地獄へ別れていくという、単純な書き方をしていると思えなくもない箇所です。しかし、もう少しこの物語を吟味するとき、この「金持ちとラザロ」の物語は、この世の価値観に深く浸されている人間の生き方を真正面から問い直している物語であることがわかります。

私たちは、特に日本では、小さいときから、人に迷惑をかけてはならないことが美徳として教えられてきました。この教えは悪い教えではありませんが、ともすると、他者に無関心であれということまで自然に教えられてしまう危険性がある教えであると感じるのは、私一人だけでしょうか。聖書は、共に生きるようにということを勧めるとき、自分の大切なものを犠牲にすることなしに他者と共に生きることはできないと教えていると、私はそう理解しています。つまりそれは、ときには、人に迷惑をかけ、またかけられるようにもなる、けれど、そこに他者と共に生きる真理が、神学がある、ということではないでしょうか。

犠牲にして迷惑をかけるということは、そんなに大げさなことが求められることではなく、今、目の前にいる人に最小限度の関心を持ちましょう、ということだと思うのです。隣の部屋で人が孤独に死んでいくのに、その隣にいる人が気づかない、こういう現代社会のあり方に、私たちは怒りを発していかなければならない、ということが求められていることだと思うのです。

「金持ちとラザロ」の物語に戻りますが、もう一度申しますと、あの金持ちはなぜ地獄行きにされたのでしょうか。金持ちの生き方は、今のこの社会のあり方から見れば、別に周りに被害を与えていたのでもないし、何も悪くない生き方をしていました。自分で稼いだものを持って贅沢に暮らすことは、当然だと言ったら当然なことです。また、金持ちがラザロに対して意地悪をしたのでもありません。けど、金持ちは死んで地獄へ行き、そこでさいなまれ、苦しみもがいています。

そうなのです。金持ちは悪いことはしていませんでした。ただ彼は、善いことをしなかったのです。人が自分に迷惑をかける機会を与えなかった。十分な余裕があったのに、それだけ裕福な生活をしていながらも、腹ペコで死にそうになって、体の傷をなめにくる野良犬さえ退ける力のない、今でも死にそうな人に、迷惑をかけさせる機会与えなかった。

つまりこの金持ちお罪は、何も善いことをしなかったことにありました。目の前のラザロが、まるで見えない透明人間であったかのように、無関心であった。

私はこの物語を考えながら、クリスマスの季節に聞きます、占星術の博士たちの物語を編集して、もう一人の博士という物語で知られるアルタバンという人のことを思い起こしました。アルタバンの生き方を通して少し考えるときをもちたいと思います。

アルタバンも、聖書の金持ちとは違うかもしれないけど、金持ちでした。そして、学識もあり、社会的に地位のある人でした。

アルタバンは、救い主がお生まれになる星を見つけて、他の博士たちと一緒に救い主を拝みに行く計画を立てます。金持ちですから、きらきらと光る宝石を準備し、ど

んな病気にも効きそうな特効薬をも、救い主に献げるために準備します。そして、救い主に会うための旅路に立ちました。ところが、他の博士たちと約束した場所へ行く途中、バビロンというところで、ナツメやしの木の下に熱病で倒れている人に出会います。彼は、他の博士たちと約束している時間が気になって、そのまま知らない顔をして通り抜こうかとも思い葛藤します。しかし、やはりアルタバンは持っていた特効薬を使ってその人を介護し、元気になるようにしてあげました。そしてなんと、その熱病の人がユダヤ人だったために、看護してもらったお礼で、救い主が生まれるところがエルサレムではなく、小さな町ベツレヘムであることを教えてもらいます。

アルタバンは、きっと神さまが自分をその人に出会わせて、その人から救い主がお生まれになるベツレヘムを教えてもらうように、預言者に出会わせてくれたのだと思って喜びました。そしてまっすぐベツレヘムに向かって進みます。しかし、アルタバンがベツレヘムに着いた頃は、他の博士たちが生まれた救い主を拝んだ後で、救い主はヘロデの二歳以下の子どもを殺す命令から逃れて、エジプトの方へ非難した後のことでした。一足遅かったのです。その事実を知らされてがっかりしているちょうどその時、ローマの兵隊たちに税金を取り立てられて逃げている幼子を抱えた母親に助けを求められます。アルタバンは、その母親の腕の子が救い主だったらどんなに嬉しいことだろうと思いながら、もっていた宝石を一つ取り出して、ローマの兵士たちに渡します。その母親の税金を支払ってやりました。これで、救い主に献げる宝石は一つしか残りませんでした。

救い主がエジプトへ非難したことを聞いたアルタバンは、救い主を探しにエジプトへまで降り、ユダヤ人たちの間を探し回ります。そうしているうちに年月が立ち、三十三年という時が流れていきます。アルタバンは年を取りました。アルタバンは、エルサレムにやってきます。過ぎ越しの祭りのときでした。そして、ナザレの人というイエスが十字架刑を受けることになっている噂を聞きます。その時、その人が、実は自分が一生涯をかけて探していた救い主であることが分かります。アルタバンは、今こそ自分が救い主を助けるチャンスだと思いました。救い主に会ったら渡そうと最後に残してあった宝、この真珠が、十字架刑の身代金となるかもしれない、彼はそう思いました。やっと自分が役に立つときがきた。そして、老いた体で必死に十字架の立つ場所のゴルゴタへ赴きます。その時です。父の借金のために売られていくある女の子の切なる訴えの声がアルタバンの足を止めます。アルタバンは思い起こしました。あのバビロンのナツメやしきの木のかげで、他の博士たちと約束の時間に遅れながらユダヤ人を介護したとき、どれだけ葛藤していたことだろうか。また、ベツレヘムのあの小さな家で、幼子を抱えた母親の税金を代わりに支払いながら、信仰と愛情の板ばさみになって、葛藤していたその時と同じような感情が、今またわきあがってくるのを感じました。しかも、この真珠は、あの十字架刑の身代金となるかもしれない。救い主を十字架刑から助けられるかもしれない。なのに、それをこの娘に使ってしまうのはとても痛々しい。しかし、アルタバンは、ポケットから真珠を取り出します。そして、切なる声で訴える娘の手

に握らせてやりました。

そのとき、家々の石の塀が揺れ動きます。アルタバンの心は、もう救い主のために、何もやってあげられないと、絶望的な思いでいっぱいでした。そこへ、地震のように地が揺れ動き、アルタバンは、神殿の崩れによって落ちた石に頭を打ち、半死状態になります。そのとき、遠くから、かすかに聞こえる小さな声にアルタバンはこのように答えるのでした。**「いいえ、違います。わが主よ、いつ、わたしは、あなたが空腹であるのを見て食べ物を与え、渇いているのを見て飲ませましたか。いつあなたが病気をし、牢にいるのを見てあなたのところにまいりましたか。三十三年間、主を捜し求めておりました。しかし、お顔を見たことも、お役立ったことも、ただの一度だってないのです」**。

するとその遠いからのかすかな声はこう言うのでした。

「わたしの兄弟であるこれらのもっとも小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と。

アルタバンはそこで安らかに息を引き取り、その旅も終わります。彼が奉げようとして持って出かけた宝はすべて、主がこころよくお受けになりました。「もう一人の博士」はこうして救い主にめぐりあったのでした。

これが「もう一人の博士」アルタバンの物語です。愚かな人の生き方のようにも見えます。けど、知らないうちに困っている人を助けるために、自分の持っている尊い物を差し出すことができる勇気は、愚かなことではありません。

特に、家族がいて、仕事があり、いろいろのことに責任を持っている私たちには、到底不可能なことだとさえ思うかもしれません。けど、アルタバンだって、差し出すたびに葛藤しています。葛藤はしながらも、大切な宝を必要としている人に差し出せる勇気、それは、あのイエス・キリストの十字架での死。ご自分の尊い命を差し出してまでも私たちを愛し、救うために、尊いいのちを差し出してくださった、その愛から学ぶものではありませんか。

イエス・キリストの尊いいのちによって救い出されている私たちには、既に、イエス・キリストという宝が与えられています。この方を伝える、今、隣であらゆることで思い煩っている人に、病の中にいる人に、孤独な人に、惜しまずにイエス・キリストを分かち合う。その愛を、そのいのちを分かち合う者として私たちは先に呼ばれ、与えられているのです。

今週は、私たちの宝であるイエス・キリストを隣り人に分かち合う週として過ごしたいです。皆さんの人生の歩みが他者と共に生きる豊かな歩みでありますように祈ります。

神さま。私たちの口をあなたの愛を伝える道具としてお用いください。そのために必要なことはすべて、既に与えられていることを、私たちは信じます。今私にあるものが決して私一人だけのものではないことをも悟りました。分かち合うために与えられているもの、そして分かち合うことによってなお豊かにされることをも悟りました。どうか、私たちひとり一人がその真理に生きる知恵あるものでありますように。いのちを与えて下さった主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。

１０月の教会のイベント ＆ 梁のスケジュール

１０月８日〈金〉～ １０月１２日(火)
１０月１０日は、韓国ルーテル教会５０周年記念会堂奉献礼拝。
この日程の中で、日韓宣教協力に関する話し合いも行われます。
（当教団より桑井豊議長、斎藤衛師、梁師が出席します。）

１０月１７日〈日〉
関東地区青年会と大宮教会の合同主催で「レッドリボン作りと講演会」を行います。日本を代表するフェミニスト神学者、山口里子さんをお招きしています。詳しいことは同封しています別紙をご参照ください。

１０月３１日(日)
宗教改革主日です。
礼拝後ルターの生涯のＤＶＤを観覧します。
もちろん、美味しい昼食もご用意しています。

ご都合の合う方はどうぞどちらの主日にもご出席ください。
お待ちしています。

【2010 年１０月礼拝予定】

【主日礼拝】毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

１０月３日(日)　聖霊降臨後第１９主日礼拝 聖　書：ハバクク２：１～４、２テモテ１：3～14、ルカ 17：1～10 主　題：神に従う人は信仰によって生きる
10 月 10 日(日)　聖霊降臨後第 20 主日礼拝 聖　書：列王記下５：1～14、２テモテ２：8～13、ルカ 15：11～19 主　題：感謝
10 月１７日(日)　聖霊降臨後第 21 主日礼拝 聖　書：創世記 32：23～31 、２テモテ３：14～4：５ 、ルカ 18：1～8 主　題：私の心の声を神さまが聞く
10 月 24 日(日)　聖霊降臨後第 22 主日礼拝 聖　書：申命記 10：12～22、２テモテ４：6～18、ルカ 18：9～14 主　題：高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる
10 月 31 日(日)　宗教改革主日礼拝 聖　書：エレミヤ 31：31～34、ローマ３：19～28、ヨハネ８：31～36 主　題：　胸に刻まれた新しい契約

（説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。）

【その他の集会】

- 第一・第三水曜日　午前 11 時より　ヨハネによる福音書の学び
- 第二・第四水曜日　午前１１時より　ハングルクラス。
- 第二・第四木曜日　午後７時より　新しい視点による聖書の学び
  「虹は私たちの間に」山口里子著購読。
- 第四木曜日　午前 10 時 30 分～　家庭集会(田嶋さん宅)
- その他、随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。

大宮シオン･ルーテル教会

〒 331-0814 さいたま市北区東大成町 1-229

Tel/Fax　048-663-0215

URL：http://omiya.church.ne.jp

Email：himei-y@oregano.ocn.ne.jp